

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

高齢者の孤立防止の場としての文化教室と、その場を用いた地域臨床の展開

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

①氏名：林 直保子

②所属・職名：関西大学社会学部・教授、社会的信頼システム創生センター・副センター長

③構成メンバー（3）人

氏名：与謝野有紀

所属・職名：関西大学社会学部・教授、社会的信頼システム創生センター・センター長

氏名：石田陽彦

所属・職名：関西大学心理臨床専門職大学院・教授、関西大学社会的信頼システム創生センター・研究員、奈良県臨床心理士会・会長

氏名：繁樹江里

所属・職名：青山学院大学教育人間科学部・准教授

(2) 実践活動・研究の成果

- ・4000字程度で記してください。図表を入れる場合は、数点程度としてください。
- ・復興にどのような貢献をしたか（する可能性があるか）を明確に記述してください。
- ・成果に基づいて論文投稿や学会発表を行った場合は、そのリストを付してください。
- ・学会ホームページで公開しますので、著作権やプライバシーの保護にご留意ください。

はじめに

本プロジェクトは、東日本大震災被災地における仮設住宅に居住する高齢者の孤立化を防ぐことで、高齢者の「孤立からの気分障害」、「気分障害から自殺」へ進展するリスクを低下させることを目的として、日本心理学会の助成を受け、活動を開始した。本プロジェクト開始時点において、本プロジェクトメンバーのうち3名が所属する関西大学社会的信頼システム創生センター（STEP）では、被災地支援プロジェクトを2011年から開始し、「関西大学人材育成・雇用創出プロジェクトセンター（岩手県上閉伊郡大槌町内）

」を被災地に設置した。同センターは、2013年年末に復興区画整理のため閉鎖されたが、このセンターを中心に、人材育成支援プログラムを実行し、現在では、多地点コミュニケーションシステムを用いた大学生による高校生の学習支援を継続している。本プロジェクトでは、こうした若者への学習支援プロジェクトを、同様のシステム（遠隔学習支援）により高齢者の生涯学習プログラムへと拡張し、高齢の集団的な学習環境の構築を実践することを目指してスタートした。生涯学習プログラムとしては、町からの要望があった「書道教室」を選択し、このような生涯学習の場への参加を契機として、高齢者が抱えている問題を発見し、気分障害から自殺へと展開するリスクを低下させる心理学的実践研究として位置づけた。

創作書道教室の開催

本プロジェクトでは、日本心理学会の助成を受けて大槌町吉里吉里の仮設集会所において、6回の創作書道教室を行った。また、大槌町内で、複数回の書道イベントを行った（表1、2）。仮設集会所における創作書道教室の参加者は各回10～15名程度であった。

表1 大槌町における活動

開催日	開催場所	内容
2013年11月10日	白澤鹿子踊保存会館伝承館	書道ワークショップ(1) 書でつくるひょうたん島
2013年11月11日	吉里吉里第2仮設集会所	創作書道教室(1) 年賀状デザイン
2014年1月27日	大ヶ口多目的集会所	歌と書のライブパフォーマンス
2014年1月28日	吉里吉里第2仮設集会所	創作書道教室(2) 白抜き書道
2014年3月24日	吉里吉里第2仮設集会所	創作書道教室(3) 木の板に書く
2014年3月25日	吉里吉里第2仮設集会所	創作書道教室(4) 名前ポエム
2014年6月2日	吉里吉里第2仮設集会所	創作書道教室(5) 行灯づくり
2014年7月13日	町内ショッピングセンター	歌と書のライブパフォーマンス
2014年7月14日	吉里吉里第2仮設集会所	創作書道教室(6) 風鈴づくり

学習と創作の場としての書道高齢者に提供することが孤立化の予防に対して有効であるとの本プロジェクトの見通しは、2013年4月までの大槌町での行政、NPO、住民からの情報提供を基礎としている。ただし、プロジェクトメンバーの多くが関西在住であり、一般的な書道教室のように頻繁に開催することは困難であったため、当初は対面による教室開催は初回を含む数回にとどめ、インターネットを介した多地点コミュニケーションシステムを活用した書道居室を計画していた。しかしながら、仮設住宅団地において提供されていた衛星を利用したインターネット環境の提供が震災後2年で廃止され、また、仮

設住宅が既存住宅地からきわめて離れた地域に設置されているため、本プロジェクトとして仮設住宅団地にインターネット回線を引くことが不可能であった。このような現地の状況を踏まえ、プロジェクト開始後に、書道教室の開催を毎回対面で行うよう計画を変更した。結果として、創作書道を行う回数は当初予定より減少したが、対面での教室により書道家を含むプロジェクトメンバーと参加者のコミュニケーションは円滑なものとなった。また、仮設住宅団地集会所を利用した多人数での教室参加の機会を本プロジェクトが作ることで、楽しみながら性別を超えて他者とかがわりあい、コミュニケーションの頻度が増加していることが観察できた。このことで、引きこもりの予防効果をもったと考えられる。なお、2014年には2日間連続の書道教室を開催したが、この回には臨床心理士が同行し、参加者や同団地住民とコミュニケーションをとり、インフォーマルに地域臨床活動を行った。

参加者の話す内容は、書道教室の回を重ねるにしたがって変化してきており、当初は無言であるか、住宅の不満を口にするといったことがみられたが、後半では冗談をいいあって声をだして笑う状況がほぼ全時間帯を占めるようになり、また、発話は確実に多くなった。書道教室を楽しみにしているといった声も聞かれるようになり、書道教室後の茶話会への参加も増え、自発的に被災時のことを語る参加者も見られようになり、被災と現在の状況を話すことでの癒しの効果もみられたと考えている。

また、2014年1月と7月の訪問では、「歌の書のライブパフォーマンス」を開催した。「歌と書のライブパフォーマンス」は、原田伸郎氏の歌にあわせて、書道家が巨大な紙に書を書くもので、仮設住宅集会所での書道教室参加者とは異なる対象に対して、ユーモアと歌、書道による楽しみを提供した。また、大槌町滞在中、仮設商店街にて仮設店舗で営業を続ける商店、食堂の看板を書道により制作する「看板屋」イベントを複数回開催した。この「看板屋」の活動は仮設店舗で復興を目指す商店街に一定の活気を与えた。この「看板屋」の活動は、初回の書道イベントの場で、参加者から表札の制作の依頼があったことをきっかけとして始まった。表札の依頼者からは「仮設住宅を出て家を建てるための」との想いが語られることが多く、未来志向へと人々の意識を変化させることに一定の効果があつた。この「表札制作」は、復興に向かう気持ちに寄り添うささやかな活動として、大槌町での書道教室のたびに実施され、その活動が仮設商店街での「看板屋」の活動へとつながり、最終的にはプレハブの仮店舗の本体そのものに店名を書くパフォーマンスにも発展し、町の活性化につながった。

表現の場としての創作書道：作品展示会への展開

本プロジェクトにおいて、生活不活発病の手段として創作書道を用いた理由として、単に美しい文字を書く技術の「学習」の場としてではなく、自らの思いを自由に表現し、癒しの効果をえるための「創作」の側面の存在があげられる。仮設集会所での教室は、当初

の目論見（孤立化の防止効果）に加え、「自己表現の場」としての効果が大きなものであることが、参加者からの聞き取りにより次第に明らかとなった。書表現する素材は、一般的な半紙のみならず、木片や風鈴、紙製の手作り行燈などさまざまなものが用意されたが、本書道教室の最大の特色は、書で表現する文字、言葉、フレーズは、参加者が自ら決定する点にあった。初回には戸惑いも見られたが、教室の回を重ねるにつれ、この自己表現の場としての創作書道が、参加者の心理にポジティブな効果を与えていることが、観察および参加者からの聞き取りで明らかとなった。「名前ポエム」などの作品には、家族に対する想いが率直に綴られることが多く、参加者同士互いに作品を見せ合うことで、コミュニケーションが促進された。

「自己表現の場としての書道教室」との位置づけが、教室参加者の中で定着したことから、本教室で制作した作品を通じて、そこから地域の外との繋がりを生み出すことによる生きがいの創生が可能であると期待できたため、4回目の教室後に、大阪市内において作品展示会を開催した。展示会は、大阪市北区天神橋筋商店街内に設置された関西大学STEPの研究拠点「関西大学リサーチアトリエ」で、2014年6月28日から7月8日まで開催された。本展示会は、本プロジェクトで書道教室の講師をつとめた書道家今柄氏、本プロジェクトで書と歌のパフォーマンスの協力者である原田伸郎氏の作品とともに展示を行い、会場には238名の来場があった。この展示会では、被災地の仮設住宅で制作された書道作品であることが明記されたため、会場を訪れる人々は被災地の現状に目を向ける機会をもち、また、現在の大阪における震災のリスクについても考えるきっかけを再度得ることとなり、大阪における防災の観点からも、小さいながらも効果をもったと考えられる。また、展示の様子は被災地にもフィードバックされ、このことが他者とつながっている自分という意識を高揚することに役に立ったことが、参加者の会話内容から推察された。

おわりに

本プロジェクトでは、高齢者の孤立化防止と生活不活発病の防止を目的として、大槌町で創作書道教室と書道イベントを継続的に開催した。当初の計画とはことなり、対面での教室開催となったが、結果として孤立化防止の効果も確認されたが、それ以上に自己表現による精神的癒し効果、大阪から訪れるプロジェクトメンバーに大槌町の現状を伝えること、さらには大阪での作品展を通じて大阪の人々が被災地に想いを馳せることから得られる癒しの効果が得られた。

本プロジェクトの成果は、文部科学省が支援するOECD東北スクールによる東北復興祭（パリ、シャン・ド・マルス公園にて8月30、31日開催）の特設ブースでも報告される。また、本プロジェクトで書道教室講師をつとめた今柄氏が特設ブースにて被災地をモチーフにした書を書くパフォーマンスを行い、被災の記憶を諸外国の方々にも留めてもらうにするとともに、その様子を被災地にフィードバックすることで、被災地が忘れられ

ておらず、被災地は孤立化していないことを提示する。

成果に基づく活動

大槌墨遊倶楽部・原田伸郎・今柄紫峯作品展示会 2014年6月28日～7月8日 関西大学リ
サーチアトリエ（大阪府大阪市北区）

OECD東北スクール 東日本大震災からの教育復興プロジェクト「東北復興祭」 2014年8
月30日～31日フランスパリ市 シャン・ド・マルス公園

年 月 日

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 会計報告書

活動・研究名称	高齢者の孤立防止の場としての文化教室と、その場を用いた地域臨床の展開	
代表者 氏名・所属	林 直保子	関西大学社会学部

1. 助成額	¥1,000,000
2. 支出合計	¥1,004,263
(1) 機器・備品	¥0
1)	
2)	
3)	
(2) 消耗品	¥13,550
1) 書道具・創作書道材料	¥13,550
2)	
3)	
(3) 旅費・交通費	¥883,917
1) 今柄氏（大阪-大槌町）2013年11月	¥76,600
2) 原田氏・今柄氏・林（大阪-大槌町）2014年1月	¥288,240
3) 西沢氏（大阪 - 大槌町）2014年3月	¥91,000
4) 今柄氏・林（大阪-大槌町）2014年5月-6月	¥131,400
5) 林（大阪-大槌町）2014年7月 航空券 2014年7月	¥62,400
6) 原田氏・今柄氏（大阪-大槌町）航空券 2014年7月	¥147,200
7) 原田氏・今柄氏・林（大槌町宿泊・レンタカー・その他移動費）2014年7月	¥87,077
(4) 謝金	¥100,000
1) 書道家（創作書道教室講師料：1名×7回）	¥70,000
2) 臨床心理士謝金（1名×1回）	¥30,000
3)	
(5) その他	¥6,796
1) 書道道具送付代金	¥4,568
2) 大槌町シーサイドタウンマストホール交流会お茶代・会場設営費	¥2,228
3)	

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。